

平田幸一先生追悼

## 顧問故平田幸一先生の追憶

佐伯史談会副会長

清田義雄

### 先生と私

顧問平田幸市が逝かれて一周忌を迎える頃となり、私にとっては最も深いかかわりで導いて下さった師の思い出を書かせていただき度い。

小学校時代初めて手工を習い、大分県師範学校入学と共に平田先生を迎え再び教えを、スポーツ関係では野球部長として県予選、更に九州大会出場のマネージャーとして師範学校チームとしては全国で初めての優勝戦までこぎつける成績を残させて下さった。残念ながら優勝を逸して鳴尾（翌年から甲子園に替わる）原頭に立つ夢は破れたが忘れがたい思い出であった。先生ご自身在校時代に野球部選手として活躍され、特に走り高跳では教師団選手として優秀な戦果を残して居られる。

池田師範に転ぜられてからも、私の手工研究専攻の目的で勤めた東京高師副手時代に、立寄られて激励して下さいました。文検合格後香川師範奉職時代には、手工研究の他わざわざ大阪からお出掛け下さって、学生に孔版研究の手ほどきをして下さった。私も退職して佐伯に居を構えると陶芸の清光窯に取り組ませて下さった。

佐伯史談会にかかわりをもつようになってからは、後述する様な先生の業績を揃えて指導して下さい、逝かれるまで格別のご愛顧に甘えさせていただいた。親子よりも関り深い恩顧をいただいて来た。今この追憶の文を書き、少しでもその業績の大きさを書きたい気持ちにかられながら、不肖の身では充分に先生の大きさをお伝えすることができない。

## 先生の歩みを追って

先生が手工科の文検を受けられるようになった動機はわからないが、大正十一年という時代の手工科は随意科目の時代で、中等教員資格をとるといってもその生かさざる場合は師範学校にしかなかった。科目の軽重を考える事の強い傾向の中学校と違っていても、軽く扱われやすい教科であった。教員養成機関としては東京高師のみで、しかも三年に一度の募集だから有資格指導者の不足の時代であった。



平田先生（龍護寺山門にて）

地方にはその指導機関もなく、予備試験の理論は数少ない参考書を探しあてて何とか勉強できても、用器画・製図に至っては受験者の最も苦心した科目である。本試になつては実技として木工・金工・粘土の製作実習が課せられ、口答諮問による教育理論と態度、人間性の判断が加えられることになつていった。

実技の木工は地方の指物師に或程度手ほどきをうけても、金工・粘土に至っては良師に恵まれる人は少い。

平田先生の金工の指導者は、東京の刀剣師宮口一貫齋で、この方は伊勢神宮二十年毎の造宮に矢尻奉獻の名工である。

上京十数日この方の手ほどきで作られた短刀の一本はなくなるまで大切にされていたご自慢の作品である。

こうした研究至難な科目の受験者は当時全国で七人程度しか合格して居なかった。この情況下に俺が母校に帰るうの熱意が一年の勉強でパスした努力は大変な事であったであろう。当時の受験者で七度試みてやっとパスされた人もある中である。

郷土史研究を中心に略歴年表を作成してみたが、先生の本命は、人間の専有物である手を、はたらく手、使え

る手とするためにどう教育するかであったから、ご自分の全身活動の中に常に創意的行動表現・技術を格別変転の多かった生活環境に働かされた生涯であったと思う。

池師在職中も、誰も考えつきそうもない「ガマ蛙のなめし皮」を研究してグロテスクな財布の製作発表は、当時の朝日新聞紙上で喧伝けんでんされた。

教育活動の背景活動と考えられる孔版研究も、資料提供の有力武器として昭和の初年にその理論体系を作りあげ、それ迄の見にくい文字があたりまえのように考えられていたガリ刷りの言葉が代弁する簡易印刷を美術印刷



ひまごさんといっしょに

にまで高めた。大阪府下は勿論、郷里の小学校迄くまなく浸透させてくれた功績は大きい。当時小数のプロ以外こうした発表もなく、秘伝として公開をはばんでいた技術者も多かった。

孔版講習テキストは私の手許にも数冊いただいている。昭和八年七月に出した『騰写版印刷法』は、池田師範学校長の序文がついて同校からの発刊になっている。これ以前の同名『騰写版印刷法』が昭和の初め、大阪朝日会館落成の節催された古書展で、古書珍本陳列即売会に出品され、卒業生が喜んで購入したと先生に報告している事を見ても、商策にぬけめない大阪で如何に先覚的なものであったかが伺われる。

先生の孔版研究は羽柴前副会長に受けつがれ、百号を越える尺余の『佐伯史談』をまとめられた業績につながる。

先生ご自身郷土史研究に打ちこまれて、一般に入手不可能の絶版本を、孔版で数々製版発刊された事は年表に書きあげただけ見ていただいてもその質と量に驚かされる。

簡易印刷の効果をこれ程駆使して、即刻多数の会員に、

奉仕的に啓発して下さって、史談会の歩みを確固たるものにして下さった顧問としての責任感に頭が下がる。

「造る」興味の領域も広く、陶芸関係に於ても佐伯の貴重な文化財の上岡十三重塔復元に当り、地中の破損された骨壺を資料として外に残すこととして、代りに先生自ら築く高政窯による見事な「所生」の銘と、いきさつをかいた銘文を刻んだ壺二個を複製されて、十七人の人骨を埋葬する事ができた。

一般の陶芸趣味家の育成に、光本さん経営の清光寮に清光窯を築き、婦人学級の陶芸教室を開かれた。高弟光本清子さんは今別府で専心これに打ち込んで居られ、県陶芸展で幾度か県展賞を貰う程の進歩を見せている。

気まま窯の別称をもつこの窯は土をこの地方に求める事から始められた。窯築造の赤土は勿論、作品の素地土（坏土）も、信楽や名古屋地方の木節など練成して直ぐ使えるものが入手可能の時代に、敢えてこの地方に粘土の荒土（掘り出されたままの土）を求めた。

見つけた粘土を①乾かし、②砕き、③篩にかけ、④練りあげる（或は水筋してはうろくに入れて乾す）など敢えて手間のかかる仕事をねらわれた。素朴さ、枯拙をね

らう先生の作風がユニークなものとして県陶芸家協会の面に異色の存在として親しみをもたれていた。

「佐伯史談会」が催した「ふるさと陶芸展」の展示が好評であった事も先生の力に負うところが多かった。その時の出品者の一人児玉亮氏は、かつて昭和の初頃に先生が佐伯に休暇中帰って染焼講習をして下さった事がきっかけでこの道に興味をわかし、今では県陶芸協会の重鎮である。

史談会でも製作の現場でその実際とお話を承る機会をつくったこともある。

晩年は特に郷土史研究に精魂を傾けられ、佐伯史談会のために忠告を惜しまれなかった。畏友故山田平之丞氏とは特に昵懇の間柄で共に佐伯に於ける郷土史研究の先導者達であった。

先生のお宅の調査をさせて戴いて今更のようにその筆まめであった事にも驚かされる。師範学校時代から書かすきで毛筆を使い、日本紙に書かれ、丹念に製本された『おちば』（豊後風土記・蒲江沖異国船漂流 御出馬行列帳 嘉永六年）、『遠い道』（里正庵予求生 陶芸の土、釉の秘法抜書）、『歌集 親』（中根貞彦著の写本）外数冊

が残されている。

また心して古書を蒐集され『佐伯藩御給人御奉公被召出候年月書上留写』（宝永六己年六月）など昭和初年大阪で、なお南華、鶴谷らの古書、古文書を『靈墨断簡』上下の中に収録された原物、明治三十年代のベストセラ―であった『惨風悲雨世路日記』鶴谷著の原本など貴重な本が残されている。

書に達者な先生は篆刻もまたお得意の一つであった。大きな厚板に篆刻された「佐伯史談会事務局」の看板、青木猛比古の詩の篆額も共にいただいている。また教知れない程の作品が知人に渡っている。贈呈者名簿を作られていたから所在もわかっているはずだが帳簿を見出すことはできなかった。

常に刀をもち、暇を見つけては歩き廻り、まことにこまめに記録に残す。製本用具もとのえてきちんとした整理をされていく。とても我々には及び難い師の姿であった。五十七年十一月二十一日早朝お宅から逝去のお知らせをうけて馳せつけた。長身で美男であった先生であったがそのお顔は、俺はやり度いことをやり終えたといった満足そうなおだやかさであった。「先生お世話にな

りました」と声にもならず、ただ合掌して御冥福を祈らせて戴いた。

### 平田幸市先生略歴年譜

年月	履歴
明二八・八・三	大分県弥生町切畑村に生る (旧姓五十川、平田家に養子となり河野家に入り、平田姓を名乗る)
明四二・三	南海部郡小倉(弥生町)高等小学校卒
大七・三	大分県師範学校校卒
〃〃・四	佐伯小学校訓導
〃十一・四	大分県女子師範学校訓導(女師附属小)
〃〃・八	文検手工科合格
〃十四・四	大分県師範学校教諭として母校に教鞭をとり、手工科担当、野球部長としても活躍
昭元・四	大阪市玉出第二小学校訓導
昭初	大阪市灘波河原小学校主席訓導に赴任 『騰写版印刷法』(テキストとして以後十数種に及ぶ)

昭四・五	大阪府池田師範学校教諭
昭八・	『泥で茶碗を造る』孔版五六頁（千里庵平内・小西金久両氏の大分師範学校に於ける四日間の講習講述をまとめた小学校粘土教材の指導書として簡易に要点網羅の好資料である）
昭十・	弥生町小倉に吉良南蕉先生胸像（陶製）を草加春陽に製作依頼あっせん、小倉高小校地にたてる
昭十三・三	池田師範学校退職、佐伯に帰る
昭十三・十二	佐伯中学校勤務
昭十五	長男里巳病気のため大分に帰る 大分県庁勤務
昭十六	大分地方木材株式会社総務課人事係勤務、佐伯木材株式会社創立事務に参画、創立後入社して大分を引きあげ佐伯に帰る
昭十八	佐伯市の大洪水に被災（床上四尺の浸水）
〃〃三・一八	敵機佐伯に来襲（蒲江に出張中）以後毎日終戦迄脅威の連続であった
昭二〇・五	長男里巳死去
昭二〇・八・一四	木材会社米機来襲で爆砕される。会社解散のため退職。以後専ら家居。

昭二〇・八・一五	終戦
昭二六・一〇	ルース台風により十三重塔倒壊す
昭二七・九	高政窯を創始
昭二七・一一	佐伯市十三重古塔再建委員となる
昭二八・一〇	平田幸市創始の高政窯により、右古塔下より発掘の七個の中の人骨十五体を納める二つのかめを焼成、塔下に埋めて塔を復元した
昭三〇	私立佐伯高等学校創立準備委員となる。 創立時代の同校の中核となって活躍、校舎増築に自ら生徒を指揮してこれを完工、卒業生はその実務的成績を評価され、百パーセント就職、任地でも信頼を厚くした。
昭三〇・一〇	1. 『古市丘の九重の塔』柴田南華稿の孔版冊子を作り発刊した。
昭三三	2. 『佐伯古戦録』孔版発行（矢野文雄起草明治二十年代鶴谷叢誌に採録、其の後豊国史談にも記載されたもの）
昭三三	柴田南華を会長とする佐伯市郷土史研究会の一員となる
昭三四	南海病院にて胃潰瘍手術、胃を半分とる。

昭四一・一〇	11 『概説佐伯通史』 山田平之丞稿 『郷土史にまとめる』
昭四一・三	10 『随筆 小倉高等小学校』 孔版 (恩師吉良南蕉先生胸像製作のいきさつ外小倉高等小学校卒業生所感文他を六〇頁にまとめる)
昭四〇・九	8 『佐伯観光あれこれ』 孔版発行
昭四一・一〇	9 『豊後全史上下完』 孔版発行 (明治一八年加藤賢成識の複製版)
昭四〇・三	7 『訂正増補 惨風悲雨世路日記』 孔版 (佐藤蔵太郎著、明治二八年十一月初版、明治三四年十月二五日、二七版、一二三頁の複製版である)
昭三七	後継者孫の克三結婚
昭三九	現佐伯史談会の発足と共に顧問に依頼される『佐伯史談』の記録としては四一年第一号に初めて印される)
昭三四・七	3 『瞰観夕想』 孔版発行 山田平之丞稿
昭三四	4 『柁牟礼実録』 孔版発行
〃	5 『龍溪記』 孔版発行 山田平之丞稿
〃	6 『観光佐伯湾』 孔版発行
昭三四・七	初めての入院で四週間。以後、号を土半とつける(幸市の幸を半分して土と半に分けたとの意)

昭四三・三	12 『靈墨断簡』 第一集 孔版発行 (昭和一二年発行佐中校友會誌「鶴城」第一八号より抜稿)
昭四四・三	13 『靈墨断簡』 第二集 孔版発行 (故人鶴谷・南華のコレクションを山田平之丞が整理したものを刷誌にまとめる)
昭四五・五	14 『常盤井路土地改良区沿革概要』 孔版発行
昭四五・五	15 『南豊花芭蕉』 孔版発行 (恩師吉良荒太先生が大別府新聞に投稿されたスクラップを主体にしてまとめたもの)
昭四五・二	16 山田平之丞歌集『いろはにえひもせず』 孔版発行
昭四六・六	17 『佐伯秘説録』 孔版発行
昭四八・六	佐伯市婦人学級の陶芸指導
昭五一・二	ふるさと陶芸展 佐伯史談会主催展に多数出品
昭五七・二一・二二	逝去(八十八才)真充院釈幸寿一徳居士 注①冊誌名上の数字は郷土史関係の冊数番号 ②私有のものを中心にまとめた。もれて いるものもある。乞教示